

『風景の哲学』

安彦 一恵

(教育学部教授)

三年前に発足した環境教育課程で「ランドスケープ論」という講義を担当している。この講義との関連で「風景」をテーマとした研究をも進めているが、昨年十月に、佐藤康邦氏(東京大学)との共編著で『風景の哲学』(ナカニシヤ出版)を出版した。その「まえがき」でも記したことだが、「風景」についてはすでに多数の著作が出版されている。しかしながら、その多くは、自分の風景感をそのまま表出しただけで極めて主観性の強いものとなっているか、あるいは、学問的研究として客観性はもつが個別学問的方法性が前面に出過ぎていて我々が(日常)「風景」として意識しているものとはズレたものの分析となっているかのいずれかである。本書は、この「客観性」と「風景の本来性」とのディレンマを「哲学」という武器を用いることによってなんとか解決しようと思ってみたものである。

抽象的に言うなら、「風景」とは世界の或る「姿」である。それは、それ自体であるというより、主観(人間)と相関的に存立している事態である。私の基本テーゼは、さらに、この相関性の或る一定のかたちとして「風景」が成立してきたというものである。だから、「風景」は歴史的なものであって、端的に近代に固有のものだと私は考えている。

私は、(近代)科学とこの風景とは同じ一つのことの両面であると考えている。科学的な世界の

見方と風景という世界意識とは、対立するものなどではなく、世界を科学的に見るようになったこととのその原因が同時に世界を風景として現出させているのである。「風景の保護」といったことも語られているが、だから、「そのためには科学への信奉を止めなければならない」といったことはまったくの出鱈目なのである。



「風景の保護」を語るとき問題なのは、「よい風景」とされるものが人によって異なることである。そこに紛争が生じてくることになるのだが、私の現在の関心事は、この紛争の解決の方途を提示することである。現時点では例えば、専ら「環境問題」について適用されているCVM(およびコンジョイント法)を「風景問題」にも適用できるようにすることなどを考えている。

これは社会科学全般の課題でもあるのだが、特に「風景」については、具体的方法を構築してい

くに先立って(純)理論的に解決すべき問題点がなお残っていると私はみている。その一つはイデオロギー性の問題である。「よい風景」の発言はその多くがイデオロギー性を伴っている。それは、広く「文化」意識のイデオロギー性の一部である。イデオロギー性をもっているので「紛争」はまさしく紛糾するのであるが、私の基本的方向は脱イデオロギー化ということにある。「よさ」の確定、あるいは「よさ」の追求の権利範囲の確定に、なんとか客観的原則を提示したいと考えている。

「どうしてお前が風景などを研究しているのか」と同業者達に言われたりすることもあるが、こう述べてくると私の本業のメタ倫理学研究とも通底しているのが了解していただけたらと思う。メタ倫理学としては、私は近年、倫理を(ちょうど「法」と同様に)一つの(汎用的)「道具」とみるか、それ自身一つの(個別的・自己目的)「活動性」とみるか、という観点で倫理観を二分できると説いているが、右の脱イデオロギー化はこの後者の倫理観の否定と平行的なものでもある。

